

天照大神・空海同體說を巡って

―特に三寶院流を中心として―

伊 藤 聡

はじめに

中世神道說、特に兩部神道と稱される密教系の神道說の形成に當たっては、伊勢神宮（及び天照大神）と密教教理を結び付けるべく幾多の説が案出された。そのうち主要なものとしては内外兩宮を胎金兩部に配當する説、「第六天魔王」説等があるが、他に宗祖空海を神宮に關連付けようとする説が存在する。その現れが空海に假託された一連の神道書群の述作であり、空海參宮說である。

これらは各々検討すべき幾多の問題を孕んでいるが、本稿では特に天照大神・空海同體說に注目したい。同説は元來『眞言付法纂要抄』を本說として、眞言宗系諸流に共有されたものだが、特に三寶院流ではより祕說化を深めていった。

三寶院流は鎌倉期の兩部神道の形成過程において重要な役割を果たしており、同説もその一環として位置付けられるものである。しかし、從來その本格的検討は餘り行われておらず、具體的な成立の経緯については不明の點が多い。

そこで本稿では、先づ三寶院流を中心とした『眞言付法纂要抄』の説の受容を跡付け、次いで天照大神・空海同體說の同流における祕說化を典型的に表す『大神宮本地』なる一書を探り上げ、その内容の検討を行う中で、同説の展開を辿っていきたいと思う。

一 天照大神・空海同體說の本說

既に指摘されているところによると、天照大神・空海同體說の初見は、小野流の祖仁海（九五―一〇四六）の正嫡を受

けた成尊（一〇二二七四）が康平三年（一〇六〇）に撰進した『眞言付法纂要抄』（以下『纂要抄』と略稱）の以下の一文である。

仰於膽部州八萬四千聚洛之中、唯陽谷內盛_ニ祕密教_ニ事見_ニ上文_ニ。又昔威光菩薩「摩利支天即大日化身也」常居_ニ日宮_ニ、除_ニ阿修羅王難_ニ。今遍照金剛、鎮住_ニ日域_ニ、增_ニ金輪聖王福_ニ。神號_ニ天照尊_ニ、利名_ニ大日本國_ニ乎。自然之理。立_ニ自然名_ニ、誠職此之由矣。是故南天鐵塔雖_レ連、全_ニ包_ニ法界心殿_ニ。東乘陽谷雖_レ鄙、皆是大種姓人。明知、大日如來加持力之所_レ致也。豈凡愚所_レ識乎。

ここにおいて、明らかに大日如來・空海・天照大神が相互に關係付けられて理解されており、後の神道説の萌芽を見いだすことができる。ただ本書の成立期において他に同様の説を説く例はなく、その同時代的影響については疑問である。寧ろこの一文は後世、特に鎌倉期以降の兩部神道説の進展の過程で天照大神・空海（更に大日如來）同體説の本説として重んじられ、しばしば引用されるようになる。

その例として、先ず高野八傑の一人尙祚（？）（二四五）の御遺告注釋書である『御遺告勸註抄』「大日本國事」に、
「小野成尊撰纂要云」として、また中性院流の祖賴瑜（一二

天照大神・空海同體説を巡って（伊藤）

二六〇一三〇四）が弘長二年（一二六一）に編纂した『御遺告釋疑抄』上の「問。大日本國矣立名所由如何」に「成尊僧都纂要云」としてこの文を引いている。更に勸修寺長吏十一世道實（一二四〇八二）の撰述とされる『高野物語』卷三の、天岩戸を釋した條りに大日如來・天照大神の同體なることを説くに當たり、その根據として「小野_ニ、中比、明匠_ニ、成尊僧都_ト中人ノ作_レル事ノ中_ニ、國ヲハ大日本國ト號也。主_ヲハ天照_ト奉_ニ名付_ト」と見え、また弘安九（一二八六）の「十一年頃成立の三寶院流の通海（一二三三）（一二三〇五）の『太神宮參詣記』下の天照大神と大日如來の同體を論じた條りに、「小野纂要ト申文」として、「昔威光菩薩」以下を書き下しながら、忠實に引いている。

しかし、これら例を見ると、天照大神と空海を同體視する點が、必ずしも引用者の關心の中心にある譯ではないように見える。例えば御遺告注釋の二書は、日本國號の由來の本説として『纂要抄』が注目されており、『高野物語』では大日・天照大神の同體を説く根據として同書が引かれ、空海に關する部分は省略されている。また『太神宮參詣記』は引文のある條りの條名が「弘法大師爲_ニ神宮同體_ニ流_ニ布密教_ニ事」とある箇所、兩者の同體が明らかに前提とされている。しか

しこの條名は通海自身に據るものではないと考えられ、また『纂要抄』は「弘法大師神明ノ御使トシテ、密教ヲ我國ニ傳給ヘリ」と記して引かれており、必ずしも明示的な表現をしていない。このような引用者の關心のずれは『纂要抄』の原文全體の曖昧さに由來すると共に、天照大神と空海を同體視する見解が、必ずしも皆に共有されたものではなかつた爲と思われる。

これに對し、この一文を明確に天照大神と空海が同體である點に注目して引いている書として、中院流の道範（二一八四—一二五二）の『初心頓覺抄』がある。同書上卷の冒頭部分是天照大神・觀世音菩薩・弘法大師・大日如來が同體なることを説き、更に救世如意輪觀音と聖德太子は同體であり、聖武天皇・聖寶もその垂迹であり、如意輪觀音はまた大日如來・彌勒菩薩・空海も同體なることを説く。その文中以下の如き一節がある。

（前略）小野僧正ノ詞ハ、神ヲハ號シ天照大神ト、國ヲハ名シ大日本國ト、祖師ヲハ遍照金剛トノ玉ヘリ。此ノ遍照ト者根本大日遍照トテ大日ノ御名也。大日遍照ト申モ天照大神ト申モ只一佛ノ異名也。

「小野僧正」とは通常成尊の師仁海を指し、成尊は「小野僧

都」と稱される。しかし仁海の詞として同様の言を傳える例は、現在の所本書の他に確認できず、「僧正」は「僧都」の誤寫乃至誤傳であらうと考えられ、「小野僧正ノ詞」とは『纂要抄』を指すと見てよいだろう。ただここは忠實な引用ではなく取意であるが、その爲却つて大日如來と天照大神と空海とが同體であることの根據として『纂要抄』が明確に位置付けられていることを知ることができる。

以上のように、この『纂要抄』の一節は、必ずしも天照大神・空海同體說の本説としてのみ注目された譯ではないにしろ、大日如來と天照大神と空海とを巡る祕說の根據として眞言系諸流において重用された。そして同書を特に重んじたのは三寶院流であつたと思われる。『纂要抄』現存諸本のうち、金澤文庫本（嘉元四年（一三〇六）劔阿写）、琴堂文庫本（元文三年（一七三三）盛辨寫）の本奥書に「嘉祿元年五月九日於遍智院以御本書寫畢／全剛佛子憲深」とあり、嘉祿元年（一二二五）三寶院流の憲深（一二九二—一二六三）が醍醐寺遍智院において本書を書寫している。憲深はその師成賢（一二六二—一二三三）より三寶院流の正嫡を嗣ぎ、その中心となる報恩院流（憲深方）の開祖となるが、遍智院はその師成賢の住坊であつたから、「御本」とは成賢の書寫本乃至相傳本を云

うのであろう。これにより成賢―憲深と續く法脈において『纂要抄』が相傳されていたと知れる。

更に先に挙げた例の中、賴瑜の『御遺告釋疑抄』は憲深の命を受けて編纂されたものであり、通海も憲深の弟子である⁽⁹⁾。彼らが直接同書を参照していることは、師の憲深との關係から理解できるであらう。また道範は中院流の流れを汲んでいるが、『初心頓覺抄』の一連の同體說の中で如意輪觀音を中心に位置付け、文中「サレハ醍醐流十八道本尊聖如意輪也」とある。後述の如く如意輪觀音を重視するのは三寶院流の特徴であり、彼の說にも同流の影響を認めることができる。

そして憲深自身も天照大神・空海を巡る祕說に關心を抱いていたことを示す資料として、彼が書寫している『一山祕密記』(建長二年(一二五〇)以前成立)なる一書がある。同書は空海が室生山の精進峯に埋めたとする如意寶珠を巡る祕說を述べたものだが、その文中以下の如くある。

凡^ニ我^カ朝^ハ、大日如來ノ還國之靈地ナルカ故^ニ、號^レ國ヲ名^ニ大日本國ト。(中略)此ノ寶珠ハ即大日遍照ノ金身塵數三昧ノ總體也。故^ニ國ヲ名^ニ大日本國ト也。此ノ寶珠ノ垂跡ヲ神道ニハ名^ニ天照太神ト。

ここでは、空海と天照大神を同體視する點が強調されてはい

天照大神・空海同體說を巡って(伊藤)

ないが、如意寶珠を介して兩者は結び付けられており、内容的にも明らかに『纂要抄』の說が踏まえられ、發展させられている。

以上の如く、三寶院流を中心に『纂要抄』を原據とする天照大神・空海同體說が成長しつつあったことが知れるが、鎌倉後期以降同流においてこの說が明確に進展していたことを示す資料として、眞福寺文庫藏『松橋流印信口決』中に收められた「天照大神(大師御事)」との外題を持つ印信がある。同印信は、奥書に「元應二年(一二三〇)十二月三日於上醍醐慈心院書寫畢」とあり、松橋流は三寶院流の支流であるから、これも三寶院流系の印信であると知れる。なおこの印信は後世、御流神道の印信集成である『御流神道八十通印信』に收められ、廣く流布したものである。⁽¹²⁾以下その全文を掲げる。

天照大神宮御事

天照大神者、內宮外宮者、先兩部萬茶羅也。是則惣躰也。亦深祕口傳即大師也。口傳云、神天照云、人遍照云。誠甚深者歟。亦大師御尺云、神天照云、國日本號誠由^(意カ)ヲヤ尺給。大師天照大神御參詣啓白文云、神是如來密、經卷即如來語密、舍利亦如來身密云云。口傳云、神者大

師意密、神咒者亦大師口密、御身者自然道理、如來身寶珠即身密也。大師即上宮太子御再來也。又是寶珠鉢習也。一切行法時、本尊无時、大師一鉢以満足習。大師是三部諸尊合成御鉢。亦三辯寶珠表示現備給。大師頂上白寶珠光炎表。亦是日輪相示。念珠御手蓮花部、五古御手金剛部、頂上佛部也。是三部惣鉢三辯寶珠表相也。云云

この中で、a「深祕口傳」、b「口傳」、c「大師御尺」、

d「大師天照大神御參詣啓白文」、e「口傳」として天照大神・空海を巡る祕説が列擧されている。このうちa bは天照大神・空海同體を説き、cは『纂要抄』に基づくと思われるが、それが「大師御尺」に變化してしまっており、口傳レベルでは『纂要抄』は背後に退いていることを示す。dは同體説ではなく、空海參宮説に基づく『太神宮啓白文』と稱するもので、頼瑜の『御遺告釋疑抄』等にも引かれており、同流には參宮説も存在したことが知れる。またeは明らかにdの影響下にできたものと思われるが、現在の所他に同様の説を見いだせない。

この印信の示す如く、鎌倉後期において三寶院流では、天照大神・空海同體説は『纂要抄』と云う原據を離れ、多様な祕説口傳として進展しつつあった。この事情は同印信と同時

期に成立した『鼻歸書』(正中元年(一三二四)成立)にも見ることが出来る。同書は三寶院流の道順の影響下に成立したものであるが、その「第五、明^ニ大師一體所變^ニ」において「今弘法大師當太神宮ノ所變也。深祕^ニ經論不見云トモ、經論^ヲ深祕^ヲ搜ル^ニ大師也」として、『纂要抄』は無視されている。ここではその根據として「遠^ハ寛平法皇御室大師^ヲ奉^レ書キ、左右ノ手^ニ左日輪、右^ニ月輪^ヲモタセ給テ、天照太神兩社^ヲ定惠^ニ二法^ニ顯シテ太神宮再誕^ト習事、無智眞言師是^ヲ不知歟」とあり、天照大神・空海同體説は、この頃になると『纂要抄』には収まり切らない祕説としての展開を示していたことが知れるのである。

二 『太神宮本地』について

この祕説化の傾向を示す典型的な存在として『太神宮本地』なる一書がある。同書については、從來殆ど注目されておらず、管見によれば、森田龍僊氏が言及している他、筆者が以前若干の紹介を試みた程度である。⁽¹⁶⁾しかし何れもその全體像について、必ずしも充分検討されてはいないので、再説も含めてここで改めて論じていきたい。

本書は空海入定を巡る祕説を述べたもので、大まかには御

遺告注釋書の一つに分類されるものである。その内容を私意によって分けるならば、①大師兩宮不二の事、②三尊合行の事、③三經一論の事、④寶珠日月一體の事、⑤興院兜率內院一體の事、⑥眞濟弘法大師號奏請の事、⑦觀賢入定大師拜見の事、⑧入定大師圖及びその説明、⑨最極記、と云う構成になる。本書の末尾に「已上一卷重書眞觀寺記之」とあり、これに従えば眞雅（八〇一〜七九）に假託しているようにも見えるが、眞雅以後の觀賢（八五四〜九二五）の事蹟を述べ（⑦）、『玄祕抄云』として實運（一一〇五〜六〇）の書が引かれている（⑤）ことからすると、これは眞雅に係わる⑨の「最極記」（後述）について云っていると見るべきであろう。

『太神宮本地』の傳本のうち、その存在が確認できたのは以下の五本である。

（A）高野山大學圖書館・正祐寺寄託本

卷子本。『神性東通記』、『大日本國開闢本緣祕抄』と合本。

生玉社眞藏密院量觀寫。

（奥書）

於醍醐寺證本頂戴書寫訖 僧正法印大和尚位光一／謹書寫畢
金剛佛子實緣「年五十二才」／應永卅三年二月廿一日、性德
院書寫了 金剛佛子秀算「五十一才」／大聖院御住持法印大和

天照大神・空海同體說を巡って（伊藤）

尙成珍／永享六年「甲丑」十一月十二日尾州中嶋郡今崎於大聖院御本申請書寫畢 成舜／康正三年「丁丑」卯月十日傳之金資成明／永正十六年廿三日授之、佛子寬慶／僧都有辯／元和二年三月廿一日、佛子宥雅授之／元祿十一年二月十六日書寫、政覺／寶永七「庚寅」歲仲春廿八日書寫了 前左學頭權大僧都堯實／此三卷原別卷也。高野山無量壽院有之。爲博覽雖書寫置、文義全依麗氣記及五部書故、外宮家／私說之、而非公共之說。後哲可用心已耳。攝陽生玉社眞藏密院現住量觀

（B）國學院大學日本文化研究所・河野省三記念文庫本

冊子本。『神性東通記』、『五輪名四輪事』、『神體圖記』と合本。慶安二年（一六四九）寫（卷末「慶安二年季春日」）。

（奥書）

於醍醐寺證本頂戴書寫訖 僧正法印和尚位光賢

（C）東寺寶菩提院本（但し大正大學圖書館藏・東寺寶菩提院マイクロ資料に據る）

冊子本。

（奥書）

於醍醐寺證本頂戴書寫訖／僧正法印大和尚位光賢以彼御本書寫了／三寶院嫡資相承大事、以別儀授比丘深圓訖／僧正光賢

〔御判〕

(D) 阿部泰郎『中世高野山縁起の研究』⁽¹⁷⁾によれば、高野山持明院藏『高野山口傳』(内題「眞言宗骨目集正智院秀傳本」、文化六年(一八〇九)寫)に「大神宮本地事(等)」を収める。その奥書はA本と「僧都有辯」部分までは同じであり、以後「慶安第三」庚寅二月廿八日書寫之 佛子秀傳。(以下畧)⁽¹⁸⁾とあると云う。

(E) 大山公淳『神佛交涉史』によれば、天保八年(一八三七)寫「大神宮本地事」と云う外題を持つ一本があり、同氏によるとその奥書に「僧正法印大和尚位光賢／應永第六枯洗十九書寫金剛佛子實縁五五歳」⁽¹⁹⁾とあると云う。

本書が三寶院流の傳書であることは、C本の奥書に「三寶院嫡資相承大事」とあることや、本文中にも「此御入定尊儀、當流嫡々祕説、正本親三寶院寶藏在之」とあることから確認できる。また以上五本をみてみるに、共通の祖本として「僧正法印大和尚位光賢」書寫本の存在が指摘できる。光賢と云えば、憲深の弟子で、建長二年(一二五〇)に憲深より許可灌頂を受けた人物がいる『續傳燈廣錄』⁽²⁰⁾卷第十一、『野澤血脈集』⁽²¹⁾卷第二、醍醐寺藏『傳法灌頂師資相承血脈』⁽²²⁾。しかし『師資相承血脈』によれば「光賢〔亮僧都〕(後畧)」とあり、僧

正にはなっていない。またC本奥書によると「光賢」は深圓なる者に本書を傳授しており、廣澤方の三輪流血脈に「後宇多院―性圓―道意―教賢―光賢―深圓」⁽²³⁾〔野澤血脈集』卷第二〕とあることから、或いはこの人物ではないかと思われる。その事蹟は不明であるが、血脈から見て南北朝期から室町初期頃に生きていた人物であると云え、その書寫年代は、DE本奥書で實縁が應永六年(一三九九)に書寫していることより、それ以前であると確認される。但し、内容的に見てその成立時期は更に溯ると考えられよう。

以下本書の内容の検討に移るが、本稿の主題に関連する①④及び⑨を考察の対象とし、他については別の機會に譲りたい。先ず①④であるが、連續した敘述となっている部分で、『御遺告』を巡る祕法である三尊合行法を釋したものである。同法は三寶院流の祕説で、その内容は實運(一一〇五～六〇)の『御遺告祕決』⁽²⁴⁾(後述するように本書は偽撰である可能性が高い)、憲深書寫『一山祕密記』⁽²⁵⁾道順(？)一三二二)の『御遺告大事』⁽²⁶⁾、文觀(一二七八～一三五七)の『祕密源底口決』⁽²⁷⁾等に述べられているが、これらに據るとその三尊とは中央に五輪寶塔を置き、左に不動、右に愛染の二明王を配する(『祕密記』『大事』『源底口決』)。また大師・實惠・眞

雅、寶珠・白蛇・奥砂である『祕決』。大師はこの三佛合體の尊であり三菩提心冥合の佛にはかならない『祕決』。この五輪塔の中には二顆の寶珠が納められ『大事』『源底口決』、その寶珠とは南天の鐵塔より流傳して空海が一山に納めた如意寶珠であり『祕密記』『源底口決』、且つ如意輪觀音である『大事』とする。この法は「東寺一家の大事、當流（三寶院流）最極祕傳」『祕決』『源底口決』であり、更には三寶院の名の由來は本法に基づくことと云われる『祕決』。

『大神宮本地』の①④も本法を巡る祕説を述べているが、①については後で検討するとして、先ず②③④の内容から見しておく。②では三尊合行とは祕經より出るところの摩尼部、觀音部、金剛部であり（瑜祇經・金剛薩埵菩提心內作業灌頂悉地品第十一⁽²⁴⁾に基づく）、これは胎藏界の三部合行法であり、金剛界に約せば五部成就祕法となるとする。③では三經一論につき、三經とは淺畧には大日經・金剛頂經・蘇悉地經であるが、甚祕には理趣經・不動祕經・愛染寶篋印經であり、一論とは菩提心論であるとする。なお立川流では三經を瑜祇經・理趣經・寶篋印經とするが、⁽²⁵⁾同流が三寶院流と深い関係にあることより見ても、三尊合行法が立川流の説と極めて近いところにあったことを示す。④では行願菩提心は不動で月輪

天照大神・空海同體説を巡って（伊藤）

を以て體と爲し、勝義菩提心は愛染で日輪を以て性と爲し、三摩地心は寶珠で日月一體の寶玉であるとする。

以上の如く②③④には三尊合行法を巡る説が述べられているのであるが、①は一見同法と直接關係がないように見える。ここでは先ず大日如來と空海とは如意輪―日輪―內宮、虛空藏―明星―外宮と一體なることを示す圖を掲げ、次いで以下のように説く。

大師兩宮不二高祖故、明星入口示不二妙躰者、本地內宮如意輪、外宮明星入身成不二、即爲兩宮眞會尊體也。甚祕々々。⁽²⁶⁾

この記述のみでは三尊合行法との關係は明確ではない。しかしこれが同法の一説であることは『御遺告祕決』を参照することにより明らかになる。同書「大師三寸影像事」において、三寸影像とは大師と惠眞二大德のことであると共に胎内最初の寸量である。更に祕傳には如意輪・不動・愛染を表す故、三地無生尊・三經一論冥合尊・三菩提心圓滿主・三部灌頂傳持尊等々であるとし、また「甚祕口傳云」として、以下のようにある。

内外ノ兩宮ヲ一身冥合ノ尊ナルカ故、謂ク內宮ハ如意輪、外宮ハ虛空藏。謂ク大師此聖德太子ノ後身、救世如意輪ノ化

身、天照太神ノ變化故、十五歳求聞持明星入_レ口冥合ス。

明星此虛空藏、外宮ノ神體也。既内宮外宮大師三尊合體故、大師御入定後歸_ニ神宮_ニ住_ニ外宮明山_ニ故、祖師口決云、明星入口現三佛形。甚祕甚祕。

ここで、大師は内宮と同體である如意輪觀音の化身であり、それが十五の時外宮と同體の虛空藏菩薩の化身である明星が口に入りたるは内宮外宮大師合體の意を表すとしており、三尊合行法の甚祕口傳として三尊を空海・内外兩宮としているのである。

この『大神宮本地』『御遺告祕決』に語られる説のうち、外宮を巡って明星―虛空藏と空海を結び付けるのは土佐の室戸崎で空海の口に明星（虛空藏菩薩の化身）が入り虛空藏求聞持法を體得したとの説（偽仁海撰『金剛峯寺建立修行緣起』等）を踏まえたものだが、それを外宮に當てるのは、通常外宮は月輪に配當されることからすると異例に屬する。一方空海・内宮（天照太神）が同體なることを語るに當たっては、空海聖德太子後身説、聖德太子・如意輪觀音同體説、及び如意輪觀音・天照太神同體説がその前提となっており、この祕説が空海・聖德太子・觀音菩薩・天照太神を巡る從來の諸説の總合化されたものとなっていることが注目される。

このうち空海聖德太子後身説及び聖德太子・如意輪觀音同體説は同時代的に共有された説として諸書に散見されるが、問題は如意輪觀音・天照太神同體説である。天照太神が救世觀音の垂迹であることは、早くは『明文抄』所引の「政事要畧」や『江談抄』に語られるところであるが、それが六觀音の何れに配されるべきかは、必ずしも諸説は一致しない。その一説としては十一面觀音説（『長谷寺祕記』『玉葉』建久五年七月八日條、『春日社私記』、『春日權現驗記繪』、通海『太神宮參詣記』）があり、また一説として聖觀音説（『二十二社并本地』、『諸神本懷集』）がある。

これに對し、如意輪觀音説は山門方で説かれる他、東密系では特に三寶院流が強調した説である。このうち山門における説は二閒觀音との關連であり（『溪嵐拾葉集』卷第四「二閒御加持事」⁽²⁸⁾）、一方三寶院流では三尊合行法との關連で同説が説かれる。そのことを詳細に語るのは先に觸れた『祕密源底口決』である。その琴堂文庫本には延元三年（一三三八）の文觀の本奥書があり、恐らく文觀の述作であると考えられているものだが、同書「寶珠尊形事」に、三尊合行の本尊たる五輪塔に收められたる如意寶珠は如意輪觀音であり、「最極習」として日本國主天照太神は一字金輪王の所變で、一字金輪王

天照太神は如意輪觀音と現じ、日輪中に住し四天下を照す、如意輪觀音は一尊に大日輪の徳と帝皇の徳を包攝しすると説く。更に、

如意輪觀自在尊へ是天照太神ノ本地、大日帝皇ノ骨目、金輪王ノ所現也。既ニ日本無雙ノ祕佛有緣無二ノ靈尊也、此上ニ佛法初テ興ニ我朝ニ。專聖德太子ノ恩德ナリ。密宗ヲ始テ渡ニ此國ニ。殊ニ弘法大師ノ威力ナリ。此ノ二聖亦如意輪應現也。有ニ如此因緣ノ故ニ、爲ニ當流至極祕法ニ。甚深意趣思⁽³⁰⁾之。

として、如意寶珠の化身たる如意輪觀音を中心にして天照太神・一字金輪王、更に聖德太子・弘法大師が同體として觀念されている。

ここに見られる如意輪觀音・天照太神・空海同體説は、前に述べた道範『初心頓覺抄』にも見えるが、『祕密源底口決』では、三尊合行法と結び付いてより發展したものになっており、『御遺告祕決』『大神宮本地』もまた同説の展開の中に位置付けることができる。

さて、『大神宮本地』①は、内容的に『御遺告祕決』との影響關係は明らかである。『御遺告祕決』は實撰とされているが、その根據は現存諸本には共通して以下の奥書が認め

天照太神・空海同體説を巡つて（伊藤）

られることに據る。

本有三半紙草子也。爲類聚私卷物書之。

應保二年「壬午」三月五日

安貞二年「戊子」六月八日以御本書寫了

建長五年「癸丑」二月八日以御本書寫畢

これに従えば、本書は應保二年（一二六〇）の成立と云うことになり、同説が平安末期まで溯ることになる。しかし、續眞言宗全書「御遺告祕決」解題が指摘しているように、實運の没年は通常永曆元年（一二六〇）とされていること、また

憲深の奥書についても彼が建長五年（一二五三）に本書を寫しているにも拘わらず、弘長二年（一二六二）に憲深の命を受けて賴瑜が編纂した『御遺告釋疑抄』には本書の引用がないこと等より見て本書が憲深以後の選述の可能性が高い。

『御遺告祕決』が偽撰であるとすれば、同説の確實なる初見は道順（？一三二一）の『御遺告大事』に「如意輪觀音是蓮華部之寶部、四種悉地相、兼究竟甚深之尊也。此即弘法大師本身天照太神本地、甚深思⁽³²⁾之」とあるものが、最も早い例となる。云うまでもなく、道順は『祕密源底口決』の撰者文觀の師である。三尊合行法自體は『一山祕密記』に見られるように道順以前に溯るうが、同法に天照太神を巡る祕

沙門實運

沙門成賢

沙門憲深

説を採り入れたのはこの道順でなかったろうか。その意味で『御遺告秘決』及び『太神宮本地』の成立にもその關與が考えられるが、その問題については次節とも關係するので、後で改めて検討する。

三 空海高宮入定説について

先の『御遺告秘決』の引文には「大師御入定後歸^ニ神宮^ニ住^ニ外宮明山^ニ」と云う一文が見えた。實はこの空海が入定後「外宮明山」に住したと云う説を、より詳細に語っているのが『太神宮本地』の最末尾にある「最極記」(先の内容構成では⑨)である。

これについては既に拙稿⁽³³⁾(門屋溫氏との共著)においては正祐寺本により、『弘法大師諸弟子全集』中卷や阿部泰郎『中世高野山縁起の研究』においては高野山持明院藏『高野山口傳』(眞言宗骨目集)所收本によりその原文が紹介されているので、ここでは書き下し文により示す。

天長十年十一月十二日、深く穀味を斷ち禪那を修したまふ。承和二年正月廿八日、最後耳語法を土心水師(堅惠―引用者註)に之を授く。語る勿れ語る勿れとて三卷の祕書を授與したまふ。一卷は入定の間、二卷は傳法の

大事等なり。同月八日より兩界の前に草座を敷き、五古を持して入定したまふ「其の間六七日なり」。同三月廿一日、念誦堂に入れ奉る。其の後日々印相替れり。同四月八日曼荼羅供儀、實惠大徳大阿闍梨と爲り、眞雅合敬し、奥院に入れ奉る。即ち禪窟に入れ奉らんと欲するに、土水心師一卷の書を實惠・眞雅に見せしむ。語を斷ち目を閉ちて觀念する所に、寶棺の内に等身の彌勒像坐したまふ。同即ち禪窟に入れ奉り畢んぬ。其の後三十二神が空中より來りて、寶棺を持して空中に登り去り畢んぬ。其の後三日を経て、御弟子六山の方へ向ひて尋ね奉る所に、道中にて神等に遇ふに語りて云はく、此の八日國主天照太神新神來臨し給ひて、種々の儀式ありと云ひて、目を閉づる間に失せ了んぬ。其の後太神宮に尋ねる所に、神達出でて云はく、此れには穢人入れずと追ひ拂ひ畢んぬ。即ち語りて云はく、國主太神祕教を弘めんが爲に出御し、此の程還御す。其の高宮の前下部坂の袖、「ふりまわし」(?)に摩呂波の鏡現れたまふとぞ傳え置く。甚深甚深、云ふ勿れ云ふ勿れ。

高宮とは豐受大神の荒鬼を祭る外宮の別宮であるが、空海は實はその前の下部坂に入定したと云う祕説がここで語られて

おり、空海入定説と天照大神・空海同體説が融合されている。特に下部坂の部分（傍線部）は、その原文が「其高社前於利邊左加乃神布利摩波志尔摩呂波乃鏡阿羅波禮多摩布止曾傳置」と萬葉假名表記となっており、本記の最極祕説たることが示されている。

この入定説が成立するに当たっては、それに先行・関連する二つの祕傳承の存在が指摘できる。先ず空海入定の時、神宮より一雙の鳥が來り偈頌を唱え、眞然がそれを空海に傳えると、彼もまた偈頌を以て答えた、その後この鳥は奥院に止住したとする祕説がある。これは道範（二一八四～一二五二）の『高野山祕記』⁽³⁴⁾が「大江朝綱外記云」として傳え、伊勢神道系の『石窟本縁』⁽³⁵⁾（二名高庫藏等祕抄、延文元年（一三五六）以前成立）「高野山奥院一雙鳥事」に載せるもので、これと関連する説は道範『初心頓覺抄』⁽³⁶⁾、良遍『日本記第二聞書』⁽³⁷⁾（應永二七年（一二四〇）成立）等にも見える。特に『高野山祕記』では二雙の鳥は不動・愛染であるとし、『石窟本縁』には奥院の鳥は每春高宮で一雙の鳥を生み、後奥院へ歸るとあり、同説の三尊合行法や高宮との関連性を示唆している。

また高宮の下部坂には三面の鏡が埋納されたとの傳承があった。前出『石窟本縁』「多賀宮坂下靈鏡事」には「竹木目記

天照大神・空海同體説を巡って（伊藤）

曰」として天平勝字二年九月十五日聖天子（聖武天皇か）が靈鏡一面を、承和二年三月に空海が二面を高宮の坂下に埋納したとある。この三面の鏡について、良遍『神代卷私見聞』⁽³⁸⁾下卷（應永三年（一二四四）成立）には弘法大師・聖德太子・倭姫命の神體とするが、元應二年（一二三〇）成立の『類聚神祇本源』神鏡篇⁽³⁹⁾には「南山大師靈」と傍書して「三面化現金鏡、豐受皇太神別宮多賀宮坂下底津岩根祿藏置也」とあり、三面とも空海の靈鏡とする。「最極記」にある下部坂の「摩呂波乃鏡」とはこれを指しているとしてよいであろう。

以上の空海と高宮を結ぶ祕説・傳承は道範の『高野山祕記』等に見られることより、中院流の流れを汲むものではないかと思われるが、兩説とも『石窟本縁』に引かれていることよりすると、伊勢神道説にも受容されていたらしい。同書は一説には伊勢神道の組織者に目される度會行忠（一二三六～一三〇五）の撰述とされており、⁽⁴⁰⁾これら中院流の祕説は極めて早い段階で伊勢に入っていたことになる。ともあれ、高宮入定説は明らかにこれらを前提として成り立っており、三寶院流の内部でのみ成立したとは必ずしも言えない點で、前節で述べた同體説とは傾向を異にしている。

その點で注目されるのが、延文六年（一二三六）以前の成

立が確認されている『神性東通記』（以後『東通記』と畧稱）である。同書は全文萬葉假名表記に一部梵字を交えた特異な表記方法を探り、文體も和文體・漢文體の違いがあるが、『最極記』と内容・表現共極めて類似しており、兩者が密接な關係にあることは歴然としている。しかしながら、『東通記』の方が内容的に詳細であり、『東通記』のみに見える箇所を、前稿（共著）の解讀文（門屋氏作成）にて示すに以下のようになる（傍線部「最極記」に該當箇所なし）。

最後耳語法を・・・授與し遣して、深禪定の顯と密との所を指南しおきて、餘の弟子共に語るな、汝が口は我が口と思ふしなりと云うぞ、よくよく慎め。・・・眞雅僧正合敬をなして、餘の弟子供養の物を捧げて・・・金銅の等身の彌勒の像を以て取り替えて、大和の國室生の禪窟に奉納せうとする所に幽冥忿怒の神達三十二神相伴ふて、土心の手より受け取って、雲の如く飛び去りぬ。三日過ぎて蓋幡の靡き行きし方を尋ねれば、・・・追ひ拂はれて、邊地つかふ祭りましまして、聞き給へば、日々に三度多賀の社の塚に八塚の上に二柱の天照る神の詔を説き給ふ。ナカマトマハシ（？）して夜晝離れて、遠く高く日出ておはします。・・・仕ふ人大和姫の命に告げ

て、今まで世々に云い傳へたり。大和姫世記には、内外の二柱の命とは上の神・下の神にてをはせり。夜晝を照らして、明らかに内外を照らして、物よし、物よし。云ふことなかれ、云ふことなかれ。

兩者の先後關係は文體上の相違もあり俄には判斷できないが、この『東通記』の獨自部分には極めて注目すべき點がある。即ち同書の末尾に伊勢神道五部書の一つ『倭姫命世記』が引かれていることである（但し、忠實な引用ではない）。伊勢神道の祕書としての『倭姫命世記』の性格を考える時、『東通記』の成立に外宮祠官が關與していたのではないかと考えられる。このことと、高宮入定説の内容から考えて、『太神宮本地』及び『御遺告祕決』の成立を巡っては、伊勢神宮（特に外宮）との關係がクローズアップされてくる。

以上の問題を更に検討するために、兩書と重要な關係を持つ『東通記』の傳來について述べておく必要がある。同書の諸本としては、管見に據れば眞福寺文庫本（三本）、高野山圖書館・正祐寺寄託本、河野省三記念文庫本、尊經閣文庫本、東北大學圖書館・狩野文庫本、東寺寶菩提院本（二本）が存在する。この中奥書を有するのは正祐寺本と河野本である。この二本とも二節で見た如く『太神宮本地』と合本にな

っており、兩書の關係の深さを示唆しているが、以下にその奥書部分を引く。

(正祐寺本奥書)

此神書者、伊勢國弘正寺律院淨喜坊慶盛比丘與賴圓。依有互爲受法之儀、以別儀所相承也。努々於小野醍醐不可有之。併天照太神高祖之神慮冥助之所致之也。可祕。尤可爲院家之重寶。後弟得心深可仰信者也。

元中四年「丁卯」八月一日

金剛佛子賴圓

應永八年「辛巳」十一月七日、於南院令書寫、於無量壽院令傳授畢。

金剛佛子良成

(河野本奥書)

延文第六「辛丑」仲春下旬之候、於白豪寺以或人本書寫之畢。

求法佛子玄空

正祐寺本奥書に據れば、元中四年（一二八七）伊勢弘正寺の住僧慶盛が賴圓（高野山無量壽院住持）に『東通記』を傳授しているが、弘正寺とは内宮神領楠部にあった西大寺の末寺である。また河野本奥書では延文六年（一二六二）に白豪寺において書寫されているが、同寺もまた西大寺の末寺である。以上のことから同書が西大寺流において相傳されていたことが確認される。鎌倉後期から南北朝期にかけて、伊勢の

西大寺流は神道説の形成に重要な役割を果たしており、その據點となったのが弘正寺であった。この時期同寺には多くの神道書が相傳されており、『東通記』の相傳もその一環として理解される。

さて、この時期の西大寺流の神道相承の中心的存在として、後に西大寺第十一世長老となった圓明寺覺乘（一二七三頃～一三六三）がいる。彼は三輪流神道の形成にも關與していたとされる人物であるが、その著作に嘉曆二年（一二二七）に智圓律師より受けた神宮を巡る祕説を筆記した『天照太神口決』（以後『口決』と略稱）がある。本書は「三箇大事（心御柱・宮殿造・子良）」「差圖口決」「別社事」よりなるが、このうち「別社事」は外宮別宮を各々五輪に配當する祕説を述べている。その中で高宮について空輪なりとし、以下次のような説を載せる（引用は高野山三寶院本に據る）。

高宮ノ坂ヲハ（下）部坂ト云也。坂ノ本ニ有リ大石。下有ニ口傳、可レ聞レ之。弘法大師入定ノ所是也。委細別ノ記ニ在レ之。最極祕事也。御入定之時奥院ニ送リ奉ル十人ノ御弟子面々ニ御共云云。但シ等身ノ彌勒ノ像ヲ造立シ奥院ニ奉レ置キ、大師ノ全體ヲハ室（生）土心ニ可レ納ム被ニ仰置ニ聞、其旨眞雅已下思給フトコロニ、自レ天（三）十二人神下

給う、大門ヲ經テ空ニ入リテ不レカ見へ、今ノ高ノ御前ノ大石ノ下ニ納メ給ヘリ。或禰宜先年支証ヲ明ニ奉レ見レ之云云。委細在リ別ノ日記ニ⁽⁴⁶⁾。

この内容が『東通記』や「最極記」と重なることは明らかである。ここは「下有リ口傳」とあることから分かる如く、本來口傳に屬し筆記されない箇所であつたらしい。そのことは「弘法大師」以下の條りが、現存諸本のうち三寶院本と同系統の吉田文庫本、大倉精神文化研究所本、宮地直一氏舊藏本、吉原浩人氏所藏本にのみ見えることから知ることができ、同説が最極の祕説であることを示している。

この口傳の存在は高宮入定説が覺乘によつて西大寺流に齎されたことを示している。とすれば、『東通記』の同流への傳來も彼が關與していたのではないだろうか。覺乘と『東通記』との關係は明らかではないが、同書を所持していた慶盛は、貞治六年（一三六七）に覺乘所持の『續別祕文』及び『梵漢同名釋義』（何れも兩部神道書）をその没後ながら書寫しており（眞福寺文庫藏『續別祕文』『梵漢同名釋義』奥書⁽⁴⁸⁾）、法脈上の關係が想定され、また河野本奥書に據れば、同書が覺乘の生前の延文六年には西大寺流に傳來しているから、同流の神道の中心的存在であつた彼が關與していなかつたとは考え

にくい。その意味で『口決』中、同説の詳細は「別ノ記」「別ノ日記」にありとあるのは示唆的である。これを『東通記』と斷定することはできないにせよ、『東通記』が覺乘によつて西大寺流に傳來された可能性が高いと考えられる。

以上の如く『東通記』が『口決』と出所を同じくすることは明らかであるが、この『口決』は、その冒頭「三寶院嫡々及御室御所」にのみ傳えられた大神についての空海の十餘卷の祕書（無題記と名付く）の口決であるとし、その末尾に、これが智圓に授けられ、更に覺乘に相傳される經緯について、以下のように述べる。

智圓權律師自心ヲ貴ク思ヒ奉ルニ、依テ不レ顧リミ大神御罰マ、參宮ノ次ニ授テ此ヲ覺乘（當長老）ニ⁽⁴⁹⁾。定テ太神ニ結縁深ク、神慮ニ相ヒ叶イ給フ人ナリ。我レ爲レ得ニ此等ノ大法ヲ修シ求聞持ツ七百日、太神ニ毎ニ越年ニ參籠スルヲ四百日、此祈請非レ爲ニ名利、如レ此聞ニト甚深ノ大法ヲ祈ル、自レ西大火炎來テ身ニ燃ヘ縣ルト見テ、入ニテ道順之足下ニ、二十餘卷ノ無題ノ祕書ヲ相傳フ此等ノ大事ヲ得畢ス。

ここにおいて、空海所傳の祕書が道順により智圓に授けられたことが語られている。この傳授の經緯を文字どおりに信ずることはできないものの、少なくとも『口決』の所説が道順

の流れを汲むものであることは、認められよう。このことは智圓が正中元年（一一三四）に著した『鼻歸書』⁽⁵⁰⁾により一層明らかになる。同書に據れば、道順は外宮神域内にあった世義寺滞在の折り、即位灌頂の辰狐法大事（『口決』の子良大事）を治部律師なる者に傳授し、それが智圓に相傳されたと言ふ。この當時、伊勢における三寶院流の據點は棚橋の法樂寺にあった。にも拘わらず道順が世義寺に滞在した理由を、同書は折からの三寶院流の正嫡争ひの隆勝派の前座主賢助が同寺に滞在していたからであるとする。道順と隆勝との正嫡争ひについては辻善之助氏等の論考があるので、詳細はそれらに譲るが、道順が滞在所として同寺を選んだ機縁は伊勢神道の度會常良（一二六三—一三三九）の存在にあった。

『鼻歸書』に據れば、常良により神宮の神寶圖（『口決』の差圖口決）が、これも治部律師を経て智圓に傳えられており、更に西大寺流の覺乘に傳えられた。⁽⁵²⁾また『口決』では心御柱を巡って内外兩宮に八大龍王がいるとするが、『鼻歸書』では同説を常良の説として見える。道順が辰狐法を後宇多院に傳授し、また常良が神寶圖を後醍醐院と關連づけていることから分かる如く、兩者を結ぶ存在として大覺寺統があり、この時期外宮周邊において同統を中心とする三寶院流（道

順）と外宮伊勢神道（常良）の提携による神宮祕説のネットワークの存在し、世義寺はその據點であつたのである。⁽⁵³⁾

高宮入定説もこの所産であることは明らかで、その意味で前引『口決』に「或禰宜先年文証ヲ明ニ奉レ見レ之」とあつた禰宜に常良の影を見ることは不當ではないだろう。彼については近世の傳承ながら下部坂から昇天したとの説があり、⁽⁵⁴⁾このことも彼の同説への關與を示唆している。『東通記』に『倭姫命世記』が引かれていることの意味も、常良の存在を考ふる時明瞭になつてくる。ただし、同書の内容は空海入定の祕事に關するものである以上、その成立には常良等外宮祠官たちだけでなく、道順を中心とした三寶院流の介在があつたことは當然である。

以上のように考えてくる時、三寶院流の『太神宮本地』に『東通記』と同様の空海高宮入定説が收められていることの意味も明らかであろう。このことと、前節の問題を考え併せる時、『太神宮本地』の撰者を道順乃至その周邊の人物に比定することができるであろう。また斷片ながら入定説を引く『御遺告祕決』についても、同様に道順の關與が認めてよいと思われる。このことを示唆するものとして、同書の高野山三寶院本本奥書には「于時貞治三年九月十八日、於勢州圓明

寺、以此書奉授道種大德畢。／圓明寺覺乘／沙門實禪⁽⁵⁴⁾とあり、同書を覺乘が所持していたことが知れ、道順から覺乘に至る伊勢における祕説相承の中に『御遺告秘決』もまた位置付けられることを示している。

むすびに

道順が空海と天照大神を巡る祕説を構想していった背景には、前述の三寶院流の正嫡争いがあった。『太神宮本地』が「三寶院嫡々大事」であることが強調されていることはそのことを如實に示している。そして、正嫡の主張の根據に神宮を巡る祕説を据えたところに、中世における神道と密教との密着した關係が窺われる。この傾向は道順のみに見られるものではないが、彼はその典型的な存在であった。

しかし、この争いは最終的に道順側の敗北に終わり、道順の説は三憲の正嫡には受け繼がれなかった。その意味で『東通記』正祐寺本奥書で、頼圓が同書を「努々於小野醍醐不可有之」と云っているのは示唆的である。また『太神宮本地』が、道順の庇護者であった後宇多院の流れを引く廣澤方三輪流に傳來したことも、以上の経緯から理解できよう。

とは云え、これらを全て道順の創案に成るとするのは、必

ずしも正當ではない。第一節で述べた如く、彼以前において既に同流では天照大神・空海同體説が成長しつつあり、特に憲深が書寫している『一山祕密記』は、明らかに道順の先蹤をなしているのであって、彼はそれをより發展させたと思われるべきであろう。また『太神宮本地』や『御遺告秘決』に顯著な立川流的言説も、實運―勝賢―成賢―憲深と云う三寶院流正嫡の説の系譜を引くのであり（例えば實運『瑜祇經秘決』、成賢『纂元面授』等）、『御遺告秘決』が實運に假託されるのも故なきことではないのである。つまり道順―文觀の説は、飽くまで三寶院の正統な流れの中から發生したのであって、これを突然變異的な異端邪説と見なすことは、當時の實態に沿うものとは言えないのである。

註

(1) 大正藏七七・四二一a、b。但し、『御遺告勘註抄』『御遺告釋疑抄』の引文等との校合の上、一部字句を改めた箇所がある。

(2) 續眞言宗全書（以後續眞全と略稱）二六・一五頁。

(3) 同右四六頁。

(4) 本文の引用は阿部泰郎『高野物語』の再發見―醍醐寺本

卷三の復原―(『中世文學』三三／昭六三・六) 所收翻刻文に據る。また本書の撰者を道實に比定したのは麻原美子氏の見解に従ったものである。(同氏『高野物語』覺書、「言語と文藝」五八／昭四三・五)。

(5) 大神宮叢書『神宮參拜記大成』七二頁。

(6) 例えば、後世のものであるが、眞福寺文庫に藏される「天照太神御託宣」なる印信では「於日本國勳力晝夜守護、於今者閉天岩戸籠居。於我國空海阿闍梨眞言傳來。護國護仁最上之祕術也。我雖不出力於今者心安矣。(後畧)」とあり、天照太神と空海の同體は前提とされてはいない。

(7) 眞言宗全書(以後眞全と畧稱)二二・一四九頁。

(8) 國文學研究資料館マイクロ資料に據る。

(9) 同書奥書に「忝承ニ師長之命愁ニ馳ニ師短之筆、仍テ遍智院ノ目錄ヲ爲レ宗、加ルニ以ニ新案之疑問ヲ。報恩院ノ口決ヲ爲レ宗、助ルニ以ニ古抄之義理ヲ」とある(續眞全二六・九四頁)。

(10) 東大史料編纂所藏『醍醐寺解等』所收「通海僧正座主所望篇目」に「初從憲深僧正、終次第之受法、遂入壇灌頂、次謁定濟僧正、重續閼梨之職位、爲付法之上足、後遇定勝法印、嫡流之印奥、至瓶水之淵源、已對三代之座主、究一流之奥蹟」とある(小嶋鉦作『大神宮法樂寺及び大神宮法樂舍の研究―權僧正通海の事蹟を通じての考察―』同著作集二『伊勢神宮史の研究』一五三―四頁所引)。

天照大神・空海同體説を巡って(伊藤)

(11) 『一山祕密記』の傳本としては琴堂文庫本、狩野文庫本、成田佛教圖書館本、東大寺圖書館本等があるが、その中琴堂文庫本(元禄六年(一六九三)寫)の末尾に記載された、その祖本である東大寺戒壇院の空智(忍空)書寫本(永仁二年(一二九五)寫)の奥書部分に「建長二(庚亥)年八月廿二日、以憲深僧正御自筆本書寫之／東大寺眞言院沙門聖守」とあり(國文學研究資料館マイクロ資料に據る)、憲深が本書を書寫していたことが知れる。なお引用は成田佛教圖書館本に據った。

(12) 久保田收『中世神道の研究』三三六頁。

(13) 啓白文はその他、伊勢御正鉢厨子納入文書・第五文書、『二所皇大神宮麗氣記』、賴瑜『眞俗雜記問答抄』第十八等に引かれている。なおこの啓白文の全文は天明二年(一七八二)に長谷寺より版行された『弘法大師法鏡錄』に收められており、『弘法大師全集』第五輯所收の『大神宮啓白文』は本書を轉載したものであるが、鎌倉期當時からこの形であったかは疑問である。

(14) 以下『鼻歸書』の引用は、神道大系『眞言神道(下)』所收本(同書五〇九頁)に據る。

(15) 森田『弘法大師の入定觀』第十一章「大師の本迹」(昭四・山城屋藤井佐兵衛)

(16) 拙稿「空海高宮入定關係資料について―その翻刻と紹介―」(門屋溫氏との共著)『論叢アジアの文化と思想』二／平五・

一一)

- (17) 元興寺文化財研究所・昭五七、四〇～一頁。
- (18) 高野山大學・昭一九、三〇九頁。
- (19) 「醍醐寺文化財研究所紀要」一・昭五三、五五頁。
- (20) 眞全三九、四〇六頁。その他成田佛教圖書館藏『御流御聖教事』所收の印信にも同様の血脈が見える。
- (21) 續眞全二六、三～七頁。
- (22) 水原堯榮「弘法大師影像圖考」(同著作集二、四三頁) 所引。
- (23) 本書の傳本は琴堂文庫、狩野文庫等であり、その中琴堂文庫本本奥書には「此法者、自宗之源底當流之極祕也。先年雖寫持之、今度天下動亂同紛失大畧燒失歟。可恐々々。仍重書寫之」延元三年 三月廿一日/東寺座主「兼醍醐寺」法務大僧正弘眞「在判」とある(國文學研究資料館マイクロ資料に據る)。なお本書については阿部泰郎「寶珠と王權」(岩波講座東洋思想二六『日本思想2』平一)一五二～三頁に詳しい。
- (24) 大正藏一八・二六七頁b。
- (25) 水原堯榮『邪流立川流の研究』(大一二・富山房 一三頁。引用は河野本に據る。
- (26) 續眞全二六、四～五頁。
- (27) 大正藏七六・五一～一頁c。
- (28) 注(23) 參照。

- (30) 引用は東北大學圖書館狩野文庫本に據る。
- (31) 續眞全二六、六頁。
- (32) 注(22) 水原氏前掲書、四三頁所引。
- (33) 注(16) 前掲論文。
- (34) 注(17) 阿部氏前掲書に翻刻があり、それを參照した(同書、六七頁)。
- (35) その傳本は内閣文庫、東北大學狩野文庫等に藏し、これらを參照した。なお本書については山本ひろ子「心の御柱と中世的世界(一一・一二)・度會氏の北辰信仰」『高庫等藏祕抄』をめぐって(上)(下)「春秋」平一・一二、平二・一一)參照。
- (36) 同書中「大師御入定ノ間、天照大神ヨリ一雙ノ烏ヲ奥ノ院ニ宿直ニ置レタリ。烏ハ日輪ノ眷屬也ト云々。」とある(眞全二二・一四九頁)。
- (37) 注(17) 阿部氏前掲書、三八頁の指摘に據る。
- (38) 神道大系『天台神道(上)』五九一頁。
- (39) 大神宮叢書『度會神道大成・前篇』六六七頁。
- (40) 同書延文元年(一三五六)の度會章尙本奥書に「本銘者行忠神主筆歟」とある。
- (41) 全文は注(16) 前掲論文參照。なおその原文も該論文に併載している。
- (42) 但し、近年佐藤眞人氏は『倭姬命世記』が既に正應二年(一二八九)には神宮の外部に流出していたことを指摘して、

その「祕書」性に疑問を呈しており、この点については一定の關係が必要である（『神道大系』天台神道（下）『山家要畧記（神宮文庫本）』解題、二一～二七頁）。

- (43) 拙稿「伊勢の神道説の展開における西大寺流の動向について」（『神道宗教』一五三／平五・一二）参照。

- (44) 岡田米夫「在伊勢古事記古寫本について」（『歴史と國文學』六一一）、青木紀元『日本神話の基礎的研究』（風聞書房、昭四五）、近藤喜博「道祥本日本書紀の傳來（正・補遺）」（『國學院雜誌』五九一・一二、六〇一・一二）等参照。

- (45) 彼の事蹟については、注(43) 前掲拙稿論文にて詳述した。

- (46) 引用は神道大系『眞言神道（下）』所收本に據る（同書五〇二頁）。但し、誤脱と思われる部分は私意により括弧にて補った。また「或禰宜先年支證」とある部分は、原文では「或彌空先年友證」とあるが、諸本との比較して明らかな誤寫と思われる、本稿の問題とも關連する箇所なので、それらに従って改めた。

- (47) 詳細は注(16) 前掲論文参照。

- (48) 『眞福寺善本目錄』三三・八七頁。

- (49) 神道大系『眞言神道（下）』五〇二～三頁。但し、同書では「道順」を「道須」に作るが、他本と校合の上改め、その他右傍注記に従って若干の字句を改めた。

- (50) 以下『鼻歸書』の引用は、神道大系『眞言神道（下）』所

天照大神・空海同體説を巡って（伊藤）

收本に據る。

- (51) 辻「兩統對立の反映としての三寶院嫡庶の争」（辻『日本佛教史之研究 續編』金港堂書籍・昭六）

- (52) 西大寺流に「神寶圖」が傳えられたことは覺乘の『口決』より明らかだが、更に同圖は、西大寺流内部で『日諱貴本紀』に挿入された形跡がある。この問題についての詳細は注(43) 拙稿参照。

- (53) この間の事情についての詳細は、門屋溫「兩部神道試論——『鼻歸書』の成立をめぐって——」（『東洋の思想と宗教』一〇／平五・六）参照。

- (54) この關係資料は『建武の中興と神宮祠官の勤王』（昭一〇・神宮祠顯彰會）一四三～六二頁に類聚されている。

- (55) 續眞全二六、六頁。但し、西大寺藏『西大寺代々長老名』（『西大寺關係資料（一）』）に據れば、覺乘は貞治二年一月二十六日に没しているから、この奥書の年次には誤りがあると思われる。